

苗床にほそく梅雨の芽生かな

夏 菊

煙管磨きて今朝用もなし夏の菊

句 帖

夏書僧たましく深を仰ぎけり

富士の雪解けて廻船戻りけり

行水や星の下行くうすれ雲

羽抜鳥人に逐はれて羽搏けり

山崩れ昼顔に道通ひけり

荏苒と父祖よりの醬油造りけり

蝙蝠 (選者吟)

月の野に蝙蝠淡き未明かな

句 帖

(曲水3-3)

納涼人に絶えて雨なき銀河かな

箱根下りれば三島は宵の納涼かな

起し絵を消してしめたる大戸かな

夜詣での人に茶店や枇杷葉湯

燈籠消えて闇とこしへの潮かな

曲水吟社七月例会

七月七日。麹町区三番町の新流觴居に、例会を開く。晴れて暑い日だったにも拘らず定刻からの来会者は二十幾人かあって、八畳二間打通した席上は少し手狭な位だった。一葉の電報が座

にあった。「ナツヤセヤヒビノツクエニカベシロシ」、碧雲居

氏からのであった。暑いので庭に面した椽側の方へ出て句案す

る人が多い。椽側には岐阜提灯が二つ、その間に走馬燈が吊さ

れてある。はばかりへ起つ人が、ひよつと立上る拍子に度々そ

れに頭を打ちつける。その度に走馬燈は軽ろく揺れた。席上

には麦湯を一ぱい容れたすさまじく大きい雅味のある土瓶が出て

ゐた。その麦湯を飲みながら皆暑さを忘れて句作した。例の通

り四時半締切。浄書、互選、徂春君の披講。(高点句他中畧)

この披講が始まらうとしてゐる処へ山田蕙子君が見えて一入賑

かさが増した。蕙子君は曲水吟社設立以前から関係深い人で、

目下北京日本公使館付から在伊太利日本大使館へ榮転に付て賜

暇帰朝中といふ榮えあり且つしかつめらしい境遇にある。今日

も他の歓迎会とかから廻ったので、これもしかつめらしいフロ

ックコートといふ扮装だったが、「どうも冬のを着てゐますか

ら御免蒙って……」と忽ちに脱いですがくしい姿になって八

方からの久潤の挨拶に忙しかった。

かくて、披講が済むと同時に席上は君の歓迎句会と化して。

葭戸を後に先生と並んだ同君の頭の上の鴨居には、「蕙子君歡

迎句会」と書いた紙片が貼出されて、君が出題にかかる「蚊遣」

五句を作ることになった。

この頃から椽側の簾は捲上られてしまつて、夜涼の中に岐阜

提灯にも走馬燈にも灯が入った。肥つて歸られた蕙子君は円み

のある声で元氣よく話す、支那の金扇を明い灯にひらめかしな

がら。句作三十分にて締切、互選、披講終つたのは九時頃。会

衆は折から外の通りの二七不動の縁日の雑踏の中に散つて行つ

た。(長頸子記)